様式２号（第５条関係）

修　士　論　文　要　旨

看護学専攻　　自然科学看護学　分野	学籍番号　219605 氏　　名　八木　なつみ
論文題目	眼球運動データを用いたリフレクションが看護場面の観察におよぼす効果
キーワード	観察、眼球運動データ、リフレクション、教育、状況認識

【目的】

本研究は、観察時の眼球運動データを用いたリフレクションが、看護場面の観察におよぼす効果を明らかにすることを目的とした。リフレクションは、観察時の自己あるいは熟練看護師の眼球運動データを注視点分布および視線移動軌跡としてフィードバックし、それを繰り返すことで情報の取り込み方や内容の理解の程度を評価、有用性を実験的に検証した。

【方法】

研究参加者は某大学看護学科3、4年生の30名とし、無作為に3群の実験条件に振り分けられた。各実験条件は、リフレクションに自己および熟練看護師の注視点分布と視線移動軌跡を用いるA群、自己の注視点分布と視線移動軌跡を用いるB群、対照群として看護場面の画像のみを提示するC群の3種類である。

研究参加者はアイマークレコーダを装着し、患者情報の確認後、看護場面の画像を観察した。看護場面は、右麻痺患者への食事介助とし、患側から介助のため誤嚥リスクがあるという問題点を設定した。観察中に問題点が理解できた時点で観察終了とし、観察開始から問題点がわかるまでの時間を反応時間とした。

研究参加者は観察終了直後にリフレクションを行い、リフレクティブサイクルに基づく問いに口述することとした。実験は以上の手順を1回とし、観察内容と関連の低い誘目性を引く物品が1つずつ追加される場面を用いて4回繰り返された。

注視領域は問題点を示す問題領域、熟練看護師の注視時間が長い重要領域、重要ではない物品や環境を示す環境領域の3領域とした。データ分析は観察時の眼球運動を解析し、各領域の総注視時間、総注視回数、総視線移動回数および反応時間について群と観察回数を要因とした二元配置分散分析および多重比較を施した。

【結果】

各研究参加者の眼球運動は、A群が他の2群よりも有意に総注視時間が長く、総注視回数は多かった。また、重要領域間および重要領域から問題領域への総視線移動回数においても、A群が他の2群よりも有意に多かった。一方でC群は、問題領域と重要領域において、総注視時間および総注視回数が有意に減少する傾向が示された。いずれの群も反応時間には有意差は認められなかった。

【考察】

自己および熟練看護師の注視点分布および視線移動軌跡をフィードバックするリフレクションは、重要領域を選択的に観察することに効果があることが示された。またリフレクション時に熟練看護師の観察の根拠を思考させたことは、領域間の関係性やその根拠を考える観察になったことが示唆された。さらに観察場面の情報量が増加しても、それに影響を受けることなく必要な領域の観察を継続して行うことが可能であった。一方、反応時間はいずれの群も変化が認められず、取り込まれた情報に対して十分に状況を理解できていない点が推察された。

以上より、眼球運動データを用いたリフレクションは観察における情報の取り込み方に変化をおよぼすことが明らかとなった。